

水生作物ハスに対する外来種ミシシッピーアカミミガメの脅威（予報）

○有馬進<sup>1)</sup>・鈴木章弘<sup>1)</sup>・鄭紹輝<sup>1)</sup>・川崎重治<sup>2)</sup>

(1) 佐賀大学・2) 元佐賀県農業試験研究センター)

【目的】

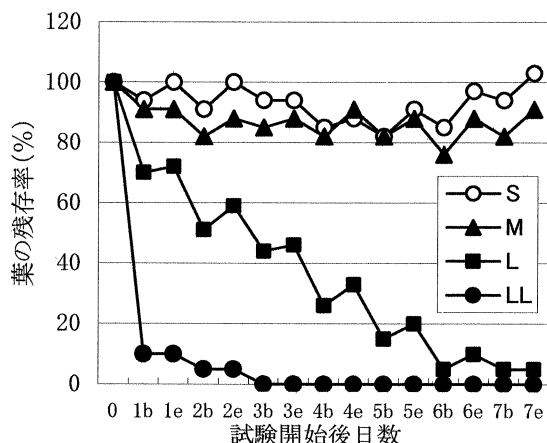
外来種のミシシッピーアカミミガメ (*Trachemys scripta elegans*) 通称ミドリガメ (以後カメと呼ぶ) は、日本各地の生態系を攪乱していると言われて久しい。カメが増殖した場合、ハス・ジュンサイ等の水生作物、修景用水生植物への食害が懸念される。佐賀城公園のお堀では2006年以降、ハスが再生しなくなり、その原因がカメの食害ではないかとの仮説が出された。本報告は、その原因究明の一環として行ったハスに対する食害調査の概要である。

【材料と方法】

ハス幼植物を植えた4つの水槽 (1.6m×4m, 水深45cm) に異なる大きさのカメを放飼し2008年5月20日から27日まで食害経過を観察した。カメは甲長15cm以下 (S) 6匹, 15-20cm (M) 6匹, 20-25cm (L) 6匹, 25cm以上 (LL) 2匹を供試した。開始時のカメ一匹当りハス葉数は、S,M,L,LL区の順に5.7本, 5.7本, 6.5本, 7.0本とした。調査期間中、カメ用飼料を給与しハス以外の餌がある状態にした。葉柄が噛み切られ葉身が流れ葉となった葉を食害葉と決め、食害葉と抽出した新葉とによる総葉数の増減から食害程度を判定した。また、最終日に各区内に残存する葉重を測定した。

【結果と考察】

S~LLすべてのカメが葉を食害した。被害部位は葉柄または幼葉の未展開葉身であり、展開後の成葉身は被害が少なかった。



第1図 カメサイズ別残存葉数比率の推移

葉の食害は、葉柄が柔らかい若いものから早く、固く古いもので遅れた。根茎は、数本掘り出されたが食痕はなかった。ただ、根茎の節部から生じた葉柄基部や根が完全に喰われて、新たに器官が形成できない状態であった。S, M区では軽微な食害で葉数を微増傾向又は維持したが、L, LL区では食害が著しく食害葉数が新葉数を超え葉数が減少の一途をたどった (第1図)。また、カメのサイズに伴って食べられた葉量は増大した (第2図)。したがって、ハス等の水生作物の栽培現場でも、カメの生息密度が高まるか、大型のカメが増えた場合、食害が発生する可能性が示唆された。

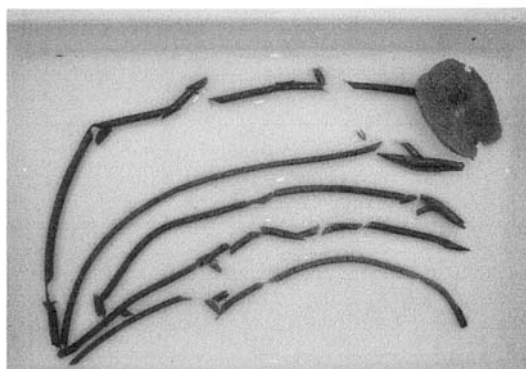
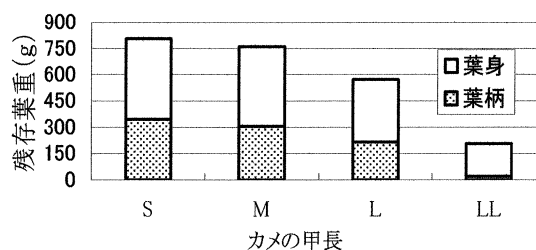
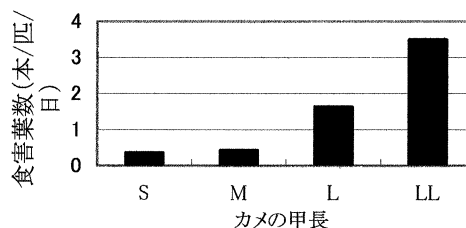


写真 食いちぎられたハス葉柄

(LLカメの放飼2時間後:予備観察で撮影)



第2図 サイズ別残存葉重 (6匹分換算)



第3図 カメ1匹が切断する葉数(推定)